

美術史学のバイブルと称されるジョルジョ・ヴァザーリ著『芸術家列伝』において、ヨハネス・ストラダヌスの章はない。ヴァザーリよりも12歳ほど若いストラダヌスは、残念ながら『芸術家列伝』の次世代にあたり、芸術アカデミーのメンバーとして最後の方に纏めた章で言及されるのみである。その分量はおよそ一ページにも満たないが、「ストラダヌスは、フランドル人でデザイン力があり、想像力豊かで、創作力もあり、色使いが素晴らしい。ジョルジョ・ヴァザーリの指導の下で Fresco と油彩を学び、メディチ家宮殿での10年間の修業でかなり熟達したことから、今ではトスカーナ大公が抱えている数多くの画家の誰と比べても遜色がない」とは彼の師匠でもあったヴァザーリの評価である。その後ボルギーニや17世紀初頭にはマンデルがそれぞれの芸術家の伝記作品においてストラダヌスに一章を捧げているが、いずれの著作もヴァザーリの『芸術家列伝』程の影響はないということは自明の理である。

本研究では、美術史家の間で曖昧模糊なマニエリスム期の芸術家として認識されているヨハネス・ストラダヌスの業績や経歴を検証しながら、彼の芸術家像をより鮮明にし、他の芸術家たちとのネットワークや、芸術の伝播の問題について議論することに努めた。

ヨハネス・ストラダヌスは、ジョヴァンニ・ストラダーノや、ヤン・ファン・デル・ストラートとも呼ばれ、その名前が複数存在する。1523年にベルギーのブルージュで画家のヤン・ファン・デル・ストラートの息子として生まれ、父やブルージュの工房で学んでから、アントワープでピーテル・アールツェンに師事し、その後独立すると同時にイタリアを目指して南下した。フランスのリヨン、ヴェネツィアを経由して1546年に辿り着いたフィレンツェでは、先ずメディチ家のタペストリー工場であるアラッツェリア・メディカ(Arazzeria Medica)にて仕事を始める。アラッツェリア・メディカは、ブリュッセル出身のフランドル人のニコラス・カルケール(Nicolas Karcher)がコジモ・デ・メディチにマントヴァから呼び寄せられて1545年に開業した工場である。つまりストラダヌスは同胞のフランドル人を頼ってそこからフィレンツェの芸術業界におけるネットワーク

を広げたのである。

メディチ家の肝煎りでアラッツェリア・メディカは当時活躍中の画家たちと関係を密にしており、工場にはロンズイーノ、ポントルモ、フランチェスコ・サルヴィアーティらが入り出りしていた。彼らとの交友関係をもとにローマに移動し、そこでサルヴィアーティと数ヶ月間一緒に仕事をしたことで彼の画風や技巧を学び、影響を受けたとされる。その後フィレンツェに戻り、1557年からはヴァザーリの下でパラッツォ・ヴェッキオの Fresco 画制作と、タペストリーのカルトンの制作に従事する。そして1563年には、フィレンツェの芸術アカデミー(Accademia delle Arti del Disegno)にポストを得るほどの成功を納める。ところが、1570年代に入ると少しずつヴァザーリと距離を置き、1576年にはナポリに移り、神聖ローマ皇帝カール五世の庶子であるドン・ファン・デ・アウストリアに仕え、彼のフランドル地方訪問に随行する。その後またイタリアに戻りフィレンツェやナポリで作品制作や、芸術アカデミーの仕事を70歳代後半までこなすが、1605年に死去する。以上が彼の経歴の輪郭であるが、本稿においては、彼のフランドルとイタリアの都市間を往来するフットワークとそれらの場所で繋がる人的ネットワークについて詳しく議論することに努めた。

ストラダヌスの作品分析としては、主としてフランチェスコ1世・デ・メディチのストゥディオロ(Studiolo)に飾られた《錬金術師の実験室(Il laboratorio dell'alchimista)》(1570)と《新発見(Nova Reperta)》(c.1588)を取り上げたが、やはりピーテル・アールツェンやフランチェスコ・サルヴィアーティに類似する様式的な要素や画風を確認することができた。また、ストラダヌスの作品は、イエズス会を通して日本にもその図像が上陸し、セミナリオの画学生たちに模倣されながらキリスト教の布教活動に伴って普及した。この問題についてもセミナリオの作品群と比較しながら更に詳しい検証を行うことができた。本研究では、フランドル地方とイタリア諸都市を往来したストラダヌス自身と同様に、彼の作品も版画などを通して国際的に普及したという点をより強く訴える議論ができた。